

21:1 ダビデはノブの祭司アヒメレクのところに来た。アヒメレクは震えながら、ダビデを迎えて言った。「なぜ、お一人で、だれもお供がいないのですか。」

21:2 ダビデは祭司アヒメレクに言った。「王は、あることを命じて、『おまえを遣わし、おまえに命じたことについては、何にも人に知らせてはならない』と私に言われました。若い者たちとは、しかじかの場所で落ち合うことにしています。」

21:3 今、お手もとに何かあったら、パン五つでも、ある物を下さい。」

21:4 祭司はダビデに答えて言った。「手もとには、普通のパンはありません。ですが、もし若い者たちが女たちから身を遠ざけているなら、聖別されたパンはあります。」

21:5 ダビデは祭司に答えて言った。「実際、私が以前戦いに出て行ったときと同じように、女たちは私たちから遠ざけられています。若い者たちのからだは聖別されています。普通の旅でもそうですから、まして今日、彼らのからだは聖別されています。」

21:6 祭司は彼に、聖別されたパンを与えた。そこには、温かいパンと置き換えるために、その日【主】の前から取り下げられた、臨在のパンしかなかったからである。

21:7 ——その日、そこにはサウルのしもべの一人が【主】の前に引き止められていた。その名はドエグといい、エドム人で、サウルの牧者たちの長であった——

21:8 ダビデはアヒメレクに言った。「ここには、あなたの手もとに、槍か剣はありませんか。私は自分の剣も武器も持って来なかった

のです。王の命令があまりに急だったの
で。」

21:9 祭司は言った。「ご覧ください。あなたがエラの谷で討ち取ったペリシテ人ゴリヤテの剣が、エポデのうしろに布に包んであります。よろしければ、持って行ってください。ここには、それしかありませんから。」ダビデは言った。「それにまさるものはありません。私に下さい。」

ダビデの行動に関しては、註解者にも賛否があります。祭司のもとに行ったのは、主のもとに行ったことであり、それは信仰の表れであるとほめる解釈のありますが、実際にはただ助けを求めて行ったようにも見えます。

ゴリヤテの剣を手にしたのは、ダビデの信仰による結果だとの解釈もありますが、それは祭司に嘘を言った結果であり、信仰者の姿勢としては間違いであったとする見方もあります。

現実的にはその両面があるということでしょう。そしてそれがダビデのように苦難にある人の、事情とそこで何とかしなければならない心の辛さではないでしょうか。

ダビデ自身も、こういうときこそ信仰で…と思ったでしょうが、それでは死ななければならないという現実がありました。やむを得ず現実的な方法を取らなければならなかったとうことが、実際に私たちにもあり得るでしょう。

しかしそのようなときでも、主はパンを用意し（それも主に献げられた祭壇の）でくださり、また剣を用意してくださったのです。

自分が力においても、また信仰においても弱い者であることを自覚して、主の前に謙遜になりましょう。それゆえに、こんな弱い自分を助けてくださる主をあがめて、信頼しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

